

ベンジャミン・ラッシュの劇的療法と スコットランド啓蒙思想

肥後本 芳 男

I はじめに—問題の所在

アメリカの医学史家は独立革命からジャクソン期にわたる専門医療の概況を評して、「劇的療法」の時代と呼んでいる。この用語は建国初期の時代の医師達が好んで用いた劇的な治療方法、つまり蔓草の塊根や水銀その他の鉱物から作る強力な下剤の頻繁な投与と大量の瀉血によって深刻な病いに対処しようとする当時の独特の治療方法を指すのであるが、医学史家の間ではそれはまた著名なフィラデルフィアの医師ベンジャミン・ラッシュ(1746-1813)の名前をしばしば連想させるのである。¹

ラッシュは革命期の熱烈な若き愛国派として名を馳せ、ペンシルヴェニアの代表として独立宣言に署名し、さらにイギリス領北アメリカ最古のメディカル・スクールとなるペンシルヴェニア大学医学部の創設期の名誉ある教授職の一つを占めた。ラッシュの生涯は、革命から建国初期にわたる政治的にも文化的にも大きな変動期に符合し、社会改革から医学理論に及ぶ彼の幅広い文筆活動は、建国期の代表的な知識人の一人として大きな影響力を持った。このような経験からして、医学史家のみならずアメリカ革命及び社会改革に興味を持つ研究者にとって、ラッシュは既によく知られた人物であり、彼の言説は今日まで多くの研究書にしばしば引用されてきている。しかしながら、従来の研究者は連邦共和制の創造に深く関わった、いわゆる「建国の父達」に匹敵するような高い関心をこれまでラッシュに向けてきたとは言い難い。ラッシュに関する本格的な伝記的研究は、これまでグッドマン、ビンガー、

ホークの三冊を挙げるのみである。² ゲッドマンとピンガーの研究は些か古くなつたとは言え現在でも大いに参照する価値のある著作であるが、それらは専ら医学史上の関心からラッシュの生涯を考察するものであり、彼の思想と当時の社会状況を包括的に解明しようと試みるものではない。この点、ホークの著作はラッシュの政治観や当時の社会状況にも多くの頁を割き、よりバランスのとれた記述になっている。だが、この著作も新連邦共和国の憲法体制の確立期にあたる1790年までで考察を終えており、残念ながら十分なものとは言えない。

歴史家による従来のラッシュ像も概して、二つの極端な解釈の中で揺れ動いてきたように思われる。一つは医学史上の考察から引き出されるものであり、ラッシュを情熱的な医師として捉えるものの、体内のほぼ五分の四にあたる大量の瀉血を柱とした新しい治療法を考案した危険で独善的な医師像である。他方は、彼の人道主義的な社会改革者としての側面を強調するもので、ラッシュの提唱した黒人奴隸制撤廃や禁酒運動、刑務所改革や女性の教育改善を訴えた啓蒙の時代の進歩的知識人としての像である。

本稿の目的は、当時ラッシュの思想形成に大きな影響力を持ったスコットランドの医学理論及び倫理哲学の思想的な背景を踏まえて、上記のような相反するラッシュ像を再考することで、ラッシュと彼の生きたアメリカ建国期文化の思想的背景の一端を探ることにある。

II 建国期の黄熱病の蔓延—共和政体とアメリカ社会

1769年夏、エдинバラでの医学留学を終えたばかりのラッシュはフィラデルフィアの港に降り立った。郷里ペンシルヴェニアにおける彼の若き開業医としての活動は、折しも植民地とイギリス本国の間の関係が急速に緊張の度合を高めてゆく時期と重なつた。元来英國国教会とクエーカー教徒がフィラデルフィア社会の上層部を占める中で、長老派に属するラッシュは常連のパトロンを獲得するのに当初苦労するが、エдинバラ大学からの学位と人

脈を通してフィラデルフィア大学(現ペンシルヴェニア大学)の新設された化学の教授職に任命されると事態は好転し始める。ラッシュの患者の数は順調に増え、翌年春には月平均35人の患者を抱え、彼は医者見習いの徒弟からの報酬を合わせればかなりゆとりのある生活を維持できるようになった。³

フィラデルフィア大学医学部の教授職を確保して以来、ラッシュはアメリカ植民地の文芸の中心地フィラデルフィアの知識人仲間に次第に接近していく。1770年代には彼はアメリカ哲学協会の主要メンバーとして活躍し始め、1773年12月のボストン茶会事件以降、植民地と本国の関係が抜き差しならぬ状況を呈するようになるといつそう積極的に反英抵抗運動に関与していく。翌年緊急な植民地連合会議である大陸会議がフィラデルフィアで召集されると、ラッシュは知識人仲間の人脈を足場に各植民地代表者との交友を広め、ジョン・アダムズ(John Adams), サミュエル・アダムズ(Samuel Adams), ジョージ・ワシントン(George Washington), リチャード・ヘンリー・リー(Richard Henry Lee)など愛国派指導者の知遇を得た。⁴ ラッシュの政治への関心はこうして急速に深まり、1776年2月フィラデルフィアの監視委員会のメンバーに選ばれてローカルな政治の舞台へ進出し、ペンシルヴェニアの代表として独立宣言書に署名する機会に恵まれた。さらに彼は熱烈な愛国派軍医としても一時革命戦争に参加し、独立の達成に尽力したのである。

ところが、独立戦争の終結と邦レヴェルでの共和国憲法の制定とともにラッシュは政治への直接的な関与を退き、専門の医学教育と社会改革の重要性を説くことに専念した。独立の達成は、彼にとってアメリカ社会と医学の大きな改革の契機となるように思われた。「ある人々の目には共和主義は反逆罪より重く映る犯罪です。君主政の下で育まれた我々の習慣や偏見の全てを治療するには半世紀を必要とするでしょう」と彼はアメリカ革命による共和政体への移行に伴って市民意識や風習の変革が一朝一夕になるものではないと警告した。⁵ ラッシュは新共和国の存続と発展に必須な条件として、教育の整備・改善を訴えるようになるが、それは彼が教育を信仰心に満ちた美

徳と有用な知識を合わせ持つ市民を作り出す「共和主義装置」として重視したからである。⁶

1787年の暑い夏に、緩やかな諸国連合に過ぎなかった連合規約の諸問題を是正するためにフィラデルフィアに衆参した各邦議員は、当初の予定を大幅に超えて諸邦の統合と連邦の強化を狙って合衆国憲法の起草に着手した。同年秋から各邦では連邦憲法の批准を巡る決議が始められ、翌年夏の合衆国憲法体制の発足とともにアメリカは広大な連邦共和国の形成に漕ぎ着けた。

1788年7月4日、フィラデルフィアでは市庁舎前の広場に1万7千人の観衆が詰めかけ世紀最大規模の祝祭を組織し、アメリカの独立と連邦憲法体制の発足を祝った。祝祭の主要な行事をなすパレードにはフィラデルフィアの紳士達だけでなく、農夫、企業家、職人、商人、牧師の一団も含まれており、それぞれの集団は老いも若きも共和国の輝かしい未来を胸に連邦共和政体における自らの職業の有用性を誇示して市中をねり歩いたのである。⁷ その光景を見物していたラッシュは「その午後誰一人として疲労を訴え、夕刻早々に安息しようと願う者に出会わなかった」と記し、祝祭の参加者の顔には肉体の強さのみならず「威厳の風格」さえ漂っていたことを認めた。さらに彼は、ヨーロッパとフィラデルフィアのパレードを比較し、封建社会では農夫や商人はこうした華やかな行事にはふさわしくない階層としてしばしば排除されるが、啓蒙された新しい社会ではお互いが各々の職業を必要とし合い、それら全ての職業が有用なのだと強調し、彼は共和政体と君主政の違いが人間の精神に与える影響に思いを馳せた。⁸

革命の成功と連邦憲法の下での連邦共和制への移行は、多くの知識人に新共和国の将来について楽観的でユートピア的な展望を抱かせた。ラッシュもジョン・アダムズに宛てた書簡の中で、「アメリカはいづれ人間性が国家、文芸、宗教的な栄光の極みに到達する舞台になるように思われます」と希望を表明した。⁹ このようなアメリカの将来に対する大いなる期待は、建国初期にジョージ・ワシントンをはじめ革命の英雄達が急速に神話化されてゆく過程

の中で、高まりつつあったナショナリズムの波と照合してこの時期のアメリカの知識人達の多くが共有したヴィジョンであった。¹⁰ 1787年にはフィラデルフィアの愛国的な医者達によって医師会(College of Physicians)が結成され、アメリカ哲学協会とならんで「友愛の都市」の知的なコミュニティの核を形成した。1792年には医師会の有力メンバーの一人であったウイリアム・カリー(William Currie)医師は、フィラデルフィアを「質実と勤勉と共和主義」の故郷であり、この地では「学問、製造業、それにあらゆる種類の人間の向上が見られ、開化する」であろうと公式に表明し、新たな共和国の首都の輝かしい将来に期待した。¹¹ 当時の知識人の多くにとって広大な連邦共和国の安定と繁栄は、新大陸での科学や文芸の開化と社会倫理の向上と密接に結び付いているように思われたのである。

ところが、1793年の夏から秋にかけてフィラデルフィアを襲った黄熱病は、このようなアメリカの知識人の楽天的な進歩観に対する深刻な挑戦を投げかけた。8月中旬にウォーター通りの一角から始まった「悪性の熱病」は急速に市域全体に蔓延した。ウォーター通りは壊滅し、至るところで数多くの病人や死者が出て、毎日のように弔いの鐘が鳴り響いたが、熱病の感染を恐れた市民はたとえ友や隣人であっても埋葬に付き添おうとはしなかった。都市コミュニティの機能は急速に麻痺した。市長の要請を受けて医師会は緊急会議を開き、熱病を食い止める手立てを協議したが、「悪性の熱病」の診断においてさえも基本的合意を得ず、事実上黄熱病の猛威の前になす術を知らなかつた。¹²

より所を失った多くの市民は熱病に侵されたフィラデルフィアを後にし始めた。連邦議会も中断を余儀なくされ、ワシントン大統領をはじめ州議員のほとんどは市外へ疎開した。黄熱病が終息するまでに当時の都市人口約5万5千人の三分の一以上にあたる1万7千とも2万人ともいわれる人々が首都を後にし、死者の数は5千人を超えた。¹³ ほんの数年前の医師会の結成式の場で、世界の中で最も「健全な国家」の最も「健康な」都市として大いに将来が

約束されていたかに見えた首都フィラデルフィアは短期間で呆気なく機能を停止したのである。

この黄熱病の蔓延は、単にアメリカの医学史的な記録に留まらず、建国期の不安定な政治文化の緊張を一気に高めた。既に述べたように医師達は、熱病に対する治療法はもとより発生要因についてさえも合意をみなかった。政治的にフェデラリスト派が多数を占める医者の多くは、熱病は仮領西インド諸島サン・ドマング（のちのハイチ）における奴隸反乱から逃避してフィラデルフィアの港に最近上陸した、2千人にも上るフランス系難民によって持ち込まれたと断定した。他方、ラッシュをはじめとするリパブリカン派の医者は、熱病が当初ウォーター通りの一角に限られていたこと、この地区の近くの波止場に腐ったコーヒーが夏の間放置され、外気にさらされて異様な臭気を発していたことを重視した。彼らは、外国人の隔離・排斥よりも市内の汚物の即時撤去や上下水道や水たまりの清掃による環境の浄化を訴えた。こうした熱病の起源論争は、貿易制限の強化と移民政策を巡る政治議論に発展し、折しも新共和国の至るところで深まりつつあった党派的対立に拍車をかけることになった。¹⁴

このように医学的にも政治的にも緊迫した状況のもとで、多くの医者がフィラデルフィアを見放したにもかかわらず、ラッシュは共和国の首都に踏みとどまる決意をし、伝染病の治療に専念する。しかし、従来の穩健でオーソドックスな治療法がこの「悪性の熱病」には何の役にも立たない事実に気づくのにたいして時間はかからなかった。かくして様々な治療法を試みる中に、ラッシュは医学留学から帰国して以来次第に彼の頭の中で体系化しつつあった「合衆国に独特の病状」に見合う「新しい医学理論」に基づく新治療法にたどり着くのである。¹⁵

後の医学史家が「劇的療法」と命名したラッシュの治療法は、当時危険な下剤と考えられていた水銀と蔓草の投与によって体内の老廃物を完全に取り除くとともに病気の初期段階で大量の瀉血を繰り返すことで、身体や神経シス

テムを弛緩させ、病気の回復を積極的に助けようとするものだった。熱病の伝染が長期化するにつれて、ラッシュの治療もいつそう過激なものになった。「最初は10から12オンスの瀉血で患者の動悸を抑えるのに十分だと思っておりましたが、次第に採血の量を増やす必要に迫られて60, 70, そして80オンスもの瀉血をするようになりました。そしてほとんどの場合、治療効果は絶大です」と親友のジョン・ロージャー医師に宛てた書簡の中で自らの「新治療法」とその効用を説明している。¹⁶

こうした過激な治療法は、すぐにフィラデルフィアの医師達の反発を招いた。ペンシルヴェニア大学の医学部の同僚でもあったアダム・クーン(Adam Kuhn)医師は、ラッシュの過度な瀉血の危険性を警告し、彼の治療法が当時のヨーロッパの伝統的な医学理論を無視した、独善的なものであるとして公に批判したのである。¹⁷ しかしながら、ラッシュはこのような痛烈な非難を耐え抜いて、自らが「医学のアメリカン・システム」と呼ぶ独特の医学理論と治療法を確立し、その後の膨大な出版物を通して建国期のアメリカ医学の発達に大きな影響を与えてゆくことになる。

III ラッシュとスコットランド医学

黄熱病との格闘を経験したラッシュは、アメリカとヨーロッパの病気を比較して、「アメリカの病気は、ヨーロッパのものより高等なものである。つまり、この力強く若々しい新国家では、病人はより重い症状を示すのでヨーロッパの疲弊した君主政の下で活力を失った民に対するよりもさらに激しい治療を必要とするのです」と述べて自らの治療法を擁護した。¹⁸ ラッシュの提唱した「医学のアメリカン・システム」は、医学における建国期ナショナリズムの奔出の一端に他ならないが、その理論は18世紀の大西洋を跨る医学の進歩と密接に結び付くものであった。

17世紀から18世紀初頭にかけて西洋医学の中心が次第にヨーロッパの北に移動し、著名な医学者ハーマン・ボーハーヴェ(Hermann Boerhaave)の体

系統的な医学理論の確立と人気を博した講義によってオランダのライデン大学が医学研究の中心地となった。しかし、18世紀の半ばには早くも啓蒙思想の普及と並行して、医学教育の重点はスコットランド及びパリに移ってゆく。¹⁹ アメリカ植民地内に今だ医学校が発達していなかったラッシュの青年時代には、植民地の有能な若者は先ず地方の著名な町医者について医学の基本を学び、三、四年の見習い修業を積んだ後、仕上げとしてロンドンやエдинバラで見聞を広めつつ最新の医学を修めるというのが一般的であった。

周知のように18世紀に入ると、エдинバラ、アバディーン、グラスゴーなどのスコットランドの諸大学が台頭し、その新たな社会思想や医学理論は大西洋を隔てたアメリカの知識人にも少なからぬ影響を及ぼした。とりわけ、スコットランドの医学校がアメリカの専門医学の形成に残した刻印は重要であった。それでは、何故植民地の若者が競ってこの時期スコットランドの大学に医学教育を求めたのであろうか。ラッシュの啓蒙思想をアングロ・アメリカの広い文脈で考察する前に、ここで当時植民地とスコットランドが商業的、学芸的に接近しつつあった主要な要因を確認しておきたい。

第一は、18世紀の半ばまでにヴァージニアやメリーランドなどの南部植民地ではロンドン商人に代わってグラスゴーのタバコ商人の進出が目立ち、スコットランドとアメリカの南部植民地の貿易関係が緊密になったことである。さらに、長老派の中北部植民地への移民が活発になり、1790年までにペンシルヴェニアでは全人口の8.6パーセントをスコッチ・アイリッシュ系の住民が占め、彼らはイギリス系、ドイツ系の住民に次いで三番目の勢力をなすまでに台頭した。²⁰ この時期目立った知識人を見ても、プリンストン大学とフィラデルフィア大学(現ペンシルヴェニア大)各々の教育カリキュラムの確立に手腕を發揮したジョン・ウィザスプーン(John Witherspoon)とウイリアム・スミス(William Smith)，連邦憲法制定の立役者の一人ジェイムズ・威尔ソン(James Wilson)，新設されたディキンソン大学学長チャールズ・ニスペクト(Charles Nisbet)，建国期を代表する作家ヒュー・ヘンリー・ブラッケン

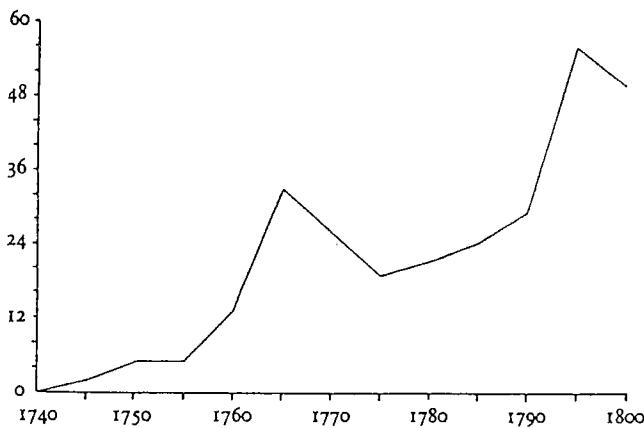
リッジ (Hugh Henry Brackenridge) などの著名な知識人達も同様にスコットランドからの移住者であった。

第二は、スコットランドの大学の授業料や滞在費がイギリスの大学に留学する際の費用に較べて、格段に安くついたことであろう。実際多くのアメリカ植民地人にとって当時イギリス本国やヨーロッパにわたり学問を修めることは、経済的に大変なことであり、大きな生活費のかかるロンドンでの修学よりは、カリキュラムも比較的緩やかで物価や授業料の安いスコットランドの医学校は魅力的であった。²¹⁾

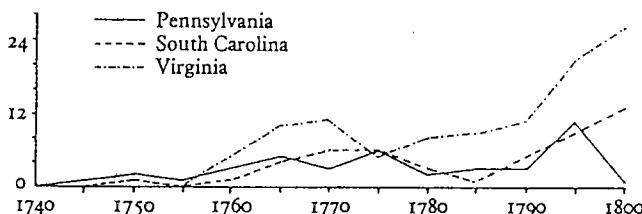
第三に、恐らくこの要因が最も決定的なものと考えられるが、エдинバラ大学をはじめスコットランドの各大学に多くの有能な教師が出て、最新の医学理論研究の中心地の一つとして急速に台頭してきたことである。

植民地の紳士達もこうした旧大陸の知的状況には敏感であり、とりわけスコッチ・アイリッシュ系の知識人の活躍が目立ったフィラデルフィアにおいてエдинバラ、グラスゴー、アバディーンの名声は高まっていた。現存するエдинバラ大学の在籍記録によれば、1765年までに15人のアメリカ植民地人がこの大学から医学博士を得ており、1765年から1779年までの間に同様の学位が112人の植民地人に授けられている。²²⁾ 恐らく記録に残らない短期間のアメリカ植民地からの留学生の数を推計すれば、何百人のアメリカの若者がエдинバラを訪れ、最新の医学理論に触れる機会を得たのであろう。(グラフ I , II を参照) 新大陸へのスコットランド医学の影響を考える上で見落とせないことは、1765年に創設された北米イギリス領植民地で最古の医学校であるペンシルヴェニア大学医学部のポストを占めた創設期の12名の教授の中で二名を除き残り10名がエдинバラでの教育を受けていた事実である。²³⁾ ペンシルヴェニア大学が18世紀から19世紀初頭のアメリカの医学教育を率いたことを考え合わせると、スコットランド医学は新共和国の専門医学の発展の基礎理論を与えたと考えてよい。

この最新の医学理論をスコットランドでいち早く吸収し、植民地への移植



Graph I. American medical students in Scotland 1740–1800



Graph II. American medical students from Pennsylvania, South Carolina and Virginia in Scotland 1740–1800

Source: William R. Brock and C. Helen Brock, *Scotus Americanus: A Survey of the Sources for Links between Scotland and America in the Eighteenth Century* (Edinburgh University Press, 1982), p. 120.

に尽力した人物が他ならぬラッシュであった。1766年の初冬長旅の末、若きラッシュはフランクリンの推薦状を携えてエдинバラに無事到着し、この地で二年間の医学の研鑽を積む。当時のエдинバラ大学は外科のアレグサンダー・モンロー二世 (Alexander Monro II), 化学のジョゼフ・ブラック (Joseph Black), 内科のウィリアム・カレン (William Cullen) といった著名な医師が集まり、イギリス帝国各地の医師を目指す多くの若者を引き付けた。特筆すべきことは、宗教的な不寛容からオックスフォードやケンブリッジへの入学を拒まれた非国教徒の優秀な若者の多くが、エдинバラで体系的な医学教育を受け、その後ロンドンやその他の地方都市に戻って大英帝国の都市文化の発展に少なからぬ貢献をなしたことである。²⁴

エдинバラでラッシュに最も感銘を与えたのは、ウィリアム・カレン医師であった。カレンは新たな観点から熱病の原因を推論し体系的な内科理論の構築を目指しており、エдинバラで最も人気のある教授であった。ブラックの詳細でやや単調な講義とは対照的に、カレンの大膽で興味深い講義は多くの医学生を引き付けた。教室外でもカレンは学生の面倒見がよく、とりわけ遠いアメリカ植民地からはるばるやってきた医学生の世話を進んで引き受けたといわれる。²⁵

17世紀のニュートン力学はライデン大学のボーハーヴェ等を通して18世紀の医学研究にも大きな影響を与え、人間の生体を機械のメカニズムで捉える、いわゆる機械論的な医学理論の浸透を促した。これに対して、カレンは機械論的な見方を排して、生体や病状をつぶさに観察して病気を分類し、その相互関係から包括的な医学理論を構築しようとしていた。とりわけ彼は、熱病の原因となる体内の炎症を従来の体液の流れの異常ではなく、むしろ血管の働きあるいは神経システムの不良にあるという説を出して、熱病の原因が局部的な血管の収縮作用の過剰な働きにあることを強調した。詳細で体系的な病気の分類とこのように大胆な内科理論を組み合わせたカレンの医学体系はまさに18世紀のエдинバラ医学の全盛期を代表するものであった。²⁶

エдинバラでの勉学を終えて帰国する途中にラッシュはロンドンとパリに立ち寄る機会を得るが、出発直前にフィラデルフィアの友人医師に宛てた書簡の中で、「二年間偉大なカレン医師の講義と実習に出席した後では、ロンドンの病院勤務医の行き当たりばったりの治療から学ぶものはほとんど無いと確信しています」とカレンの医学理論への傾倒ぶりを伝えている。²⁷

帰国後ラッシュはフィラデルフィア大学の新設医学部の教授職の一つに任命され、開業医と教育者の役割を兼務するとともにエдинバラの医学理論の普及に尽力した。他方で、ブラックの化学体系とカレンの内科理論を医学生に教授する傍ら、ラッシュは独自の医学理論の構築を模索していた。彼は熱病原因に関するカレンの血管収縮説に共鳴するものの、カレンの詳細な病気分類システムを退けてあらゆる病気の要因は外界の刺激によって誘発されるという、いわゆる環境要因的な医学理論を打ち出した。これは、生命体は外界からの刺激によって絶えずストレスを受けた状態にあり、生体内の衰弱と興奮の均衡の崩れが病気の症状として現れると説いた同じカレン門下のジョン・ブラウン(John Brown)医師の理論と重なるものであり、ラッシュはこのブラウンの外界刺激説をカレンの血管収縮説に取り込んで、よりシンプルで一貫した医学理論を編み出すのである。²⁸ 具体的に言えば、ラッシュは様々な症状の違いに関わらずあらゆる種類の熱病には血管の「不規則な活動あるいは収縮」が共通して見られるとし、外界の刺激によって血管壁になんらかの異常な運動が起こるために身体は過剰な熱を帯びることになるという見解に到達した。²⁹ 彼は全ての熱病の発生のメカニズムは同じであると判断し、血管壁の収縮あるいは神経システムの過剰な運動こそが熱病の直接の原因であるので、この過剰な活動を鎮静化させることができが最も効果的な治療であると推論したのである。かくして、ラッシュにとって赤痢も黄熱病もチフスも全て同種の熱病(fever)に他ならず、カレンの病状に基づく詳細な病気の分類は医学の体系化をやみくもに複雑なものにし、かえって治療の現場に混乱を招き兼ねないように思われた。

ラッシュにとって病状の違いこそあれ、病気の実体は唯一つであり、医師の仕事は症状を注意深く観察し、血管収縮の度合を適切に正す処置を迅速に行なうことであった。瀉血と水銀はそのために最適でかつ不可欠の手段であるように思われた。93年の黄熱病蔓延の危機的状況の中で適用された「劇的な治療法」の背景には、このようなラッシュの論理的根拠があったのである。疫病発生の翌年、ラッシュは友人の一人に宛てた書簡の中で、「(フィラデルフィアに)到着して間もなく黄熱病にかかったイギリス人の体内から、6日間で12回もの瀉血を繰り返して144オンス(約4リットル)もの血を抜き、同時に蔓草などの強力な下剤とおよそ150グラムの水銀を処方しました」とその「新しい治療法」への信念を伝えている。³⁰

ラッシュの医学理論形成の背景として、ここでもう一つ視野に入れて考えなければならないことは、当時のヨーロッパの文明論争とスコットランドの道徳哲学の隆盛である。とりわけ、ラッシュの過激な治療法と彼の社会改革運動への情熱との接点を見い出すためには、単なる医学理論の考察を越えた、当時の環大西洋的なより広い思想状況の中で、今一度彼の革命観や医学観を考察する必要がある。

IV 博物学の興隆とスコットランド倫理哲学

18世紀半ばの博物学の流行とスコットランド啓蒙思想の中心をなす道徳哲学は、ラッシュの医学観の形成に大きな痕跡を残した。とりわけ「スウェーデンのニュートン」として賞賛されたカール・リンネ(Carl Linnaeus)の体系的な植物分類、『自然の体系』(*Systema Naturae*, 1735)は、この時期生物学者のみならず多くのアマチュア紳士達の間で博物学への関心を搔き立てた。『文芸・科学一般雑誌』(the *General Magazine of Arts and Sciences*) や『ロイヤル・マガジン』(the *Royal Magazine*)、『マンスリー・レビュー』(the *Monthly Review*)などのイギリスの人気雑誌は博物学関連の記事や挿絵、書評をこぞって掲載し始め、生物の分類や環境と生物との相互作用を巡る議論がヨーロッパの知

識人の間で盛んに交換されるようになった。³¹ この時代のナチュラリスト達にとってとりわけ新大陸は最後の広大な未探検の地域であり、ここに棲息する動植物への関心もいっそう高まっていった。こうした知的潮流にともなって、アメリカ植民地でも18世紀半ばにフィラデルフィアのバートラム父子(John and William Bartram)はカロライナ、ジョージア、フロリダ地域を探検して多くの植物を採取し、また、スウェーデンの植物学者、ピーター・カルム(Peter Kalm)も同時期新大陸を広範囲に旅行して様々な貴重な観察記録を残した。³²

さらに1748年のモンテスキューの『法の精神』の出版を契機として、気候と制度、風習、つまり「地上の自然」と「政治的法秩序」の因果関係を体系的に把握しようとする古典的な関心が復活した。モンテスキューは、「人間の精神と感情の性質は、様々な気候の中で著しく異なる」ことを強調し、その権威のある著作の第三部のほぼすべてを風土と文明や法制度との関連の考察に費やして、啓蒙の知識人全般に大きな影響を及ぼした。³³

このような法社会学的なアプローチは、フランスの偉大な博物学者兼文人、ビュフォンの著名な『博物誌』(1761)において博物学との融合を見た。ビュフォンは、あらゆる地球上の自然を雄弁に記述しようと試み18世紀に隆盛した博物学の中心的な役割を果たした。また、彼は新大陸とそこに棲息する生物に関する彼独特の衰退説、つまり「新大陸に原生する動物の体は(ヨーロッパのものに較べて)より小さく、豚を除いて食欲も性欲も減退し弱々しくなる。アメリカの環境と自然是動物の発達に敵対的である」という説を表明した。³⁴ 他方、フランスのアメリカ植民地化推進政策に反対する一部のヨーロッパの啓蒙家、デュ・ポウ(De Pauw)やアベ・レイナル(Abbe Raynal)は、ビュフォンの仮説をすぐに拡大解釈し、新大陸は未熟な土地でありその寒暖の厳しい自然環境が人間を含むあらゆる生き物の肉体的、倫理的、知的な退化現象をもたらすので、新大陸における文明の勃興には期待できない、として新旧大陸間の知識人の議論を大いに刺激した。³⁵ ジェファソンが新大陸の

動物のサイズに終生こだわり続け、ラッシュが新世界に固有の病気やアメリカ人に適した土着の治療法、つまり「医学のアメリカン・システム」を模索して博物学に関する様々な情報を交換しあったのもこうした大西洋を隔てた文明論争に深く根ざしたものだったのである。

このような知的な潮流の中で、大英帝国の文化的辺境にあったスコットランドでも啓蒙の波が押し寄せていた。ラッシュが医学研修の地としてロンドンやライデンを避けて、あえてエдинバラを選んだのも医学研究の中心がスコットランドに移動していたからに他ならなかつたが、医学の勉強の傍らエдинバラで彼はハリントン (James Harrington), シドニー (Algernon Sidney) 等のイギリスの急進的共和主義思想に触れ、フランシス・ハチソン (Francis Hutchenson), アダム・ファーガソン (Adam Ferguson), トマス・リード (Thomas Reid), ジェイムズ・ビーティ (James Beattie) といった当時のスコットランド倫理哲学の洗礼を受けた。³⁶

スコットランド倫理哲学は、ロックの『人間悟性論』や『教育に関する考察』で展開された認識や知識の獲得において感覚・経験を最重視する考え方を引き継ぐ一方で、18世紀に商業活動の拡張とともにイギリス帝国内で進行しつつあった、いわゆる「消費革命」に連動する商業社会の到来に相応するように社会倫理観をいっそう体系化したものである。³⁷

ダブリンとグラスゴーで倫理哲学を講じたフランシス・ハチソンは、いち早く閉塞的なスコラ哲学を排して大学の人文カリキュラムの大幅な改革を先導する傍ら、圧政に対する人民の抵抗権と市民的、宗教的自由を体系的に教え、彼の自由主義的な講義は当時「カントリー派」の知識人の間で幅広い支持を得た。ハチソンの哲学の基本原理は、人民は全て等しく本能的に道徳感覚を共有しており、早期の適切な教育によって知力のみならず道徳心も陶冶され有徳な市民の共同体の形成につながると主張するものであり、やがて道徳的哲学として総括される「スコットランド学派」の基礎をなした。さらに重要なことは、彼の著作はジョン・ウィザスプーンを初め多くの熱心な弟子を通

して遠くアメリカ植民地の指導者にも伝えられ、後年革命と独立に際して愛国派論客に論理的武器を与えて大きな影響を及ぼしたことである。³⁸

英国との合邦後、18世紀のスコットランドにランケニアン・クラブ、哲学協会、選良協会などの様々な文芸サークルが隆盛し、エディンバラが「学芸共和国の首都」として発展するにつれて、ハチソンの道徳哲学はその継承者達によっていつそう体系化されてゆく。もちろん「スコットランド学派」は当時完全に統一された哲学体系を成していたわけではなく、ここではその詳細な議論の違いに立ち入る余裕はないが、ハチソンの道徳哲学は感覚哲学に対するヒューム (David Hume) の懐疑論に挑戦する形でトマス・リードやジェイムズ・ビーティによって最も効果的に洗練された。彼らの著作はやがてアメリカ植民地でも広く知られるようになり、7年戦争の終結を機に急速に具体化した帝国の再編成に反発して反英抵抗運動に立ち上がった植民地人の関心を引いた。リードは知識の最初の原理は本能的に知ることができ、我々の基本的な五感のように、直接的に、自明に認知することができるとし、理性に先立って哲学者にも無教養な者にも等しく普遍的に備わっている「コモン・センス」の存在を主張した。リードの哲学は洗練された知識人の詭弁的な修辞を嫌い、人民の共有する簡素な言語と道徳的判断力に絶対的な信頼を置くものであり、18世紀末から19世紀初頭にかけてアングロ・アメリカ世界に一気に押し寄せる自由民主主義的な社会の先駆的な思想的枠組みを提供したと言える。³⁹

ハチソン、リード、アダム・スミスなどスコットランドの著名な思想家達が使用する用語や論点の強調は異なるものの、彼らは人間の生まれながら平等に備わっている本能的感覚として「モラル・センス」、「コモン・センス」を強調し、近代の文明共和国の市民社会の形成に自然な秩序と調和を与えるものとして「センティメンタリティ」や「同感」、「慈悲心」を同様に重視した点で共通項がある。このような観点から、スコットランドの指導的な知識人の多くは「自明な」真理の直感的な認識の存在と環境の教育に与える影響の重

大きさを説いたのである。⁴⁰

長老派ニューサイドとプリンストン大学のリベラルな伝統の中で青春期を過ごした、ラッシュがスコットランド倫理哲学の道徳的で簡素な論理体系に共鳴したのは自然なことであったかもしれない。また、1776年の初めに彼がフィラデルフィアでイギリスから移住して間もない当時無名のトマス・ペインに会い、ペインの歴史的なパンフレットを出版する労をとった時、それに『コモン・センス』と名付けたのは象徴のことである。

ラッシュが1786年に刊行したエッセイは、彼の倫理観や環境主義がスコットランドの啓蒙思想に多くを負っていたことを如実に示す。エッセイの中でラッシュはビーティの「モラル・ファカルティ」の教義に従って道徳を人間の精神が善悪を判断し、美德と惡徳を見分ける本能的判断力として定義した上で、物理的原因、すなわち気候や食事、習慣を含む環境が道徳感覚の形成に及ぼす影響を論じ、医者の処方する薬が同様に道徳感覚に与える影響を考察する必要性を説いている。ラッシュは「アメリカ人の健康は地球の他の地域よりは良好なのであろうか、異なった政治形態は健康と病気にどのような影響を及ぼすのか」と問い、健康の維持と人格の形成における広い環境の整備の必要性を訴えた。⁴¹ 健全で有徳な市民の創出と近代の共和国を根底から支える基礎的手段として教育と知識の広い普及を強調するスコットランドの倫理哲学に共鳴したラッシュは、人民の道徳感覚の本能的な良識とその陶冶における環境の重要性を確信するようになった。建国初期に広範囲な社会改革の提唱者として活躍する彼の思想的源泉は、敬虔なキリスト教的人道主義と並んでこのようなスコットランド啓蒙思想の社会倫理観に見ることができるのである。

さらにラッシュは、環境や外的刺激が人体に及ぼす影響に言及して、「健康な状態の体の一部分に刺激が加われば、他のあらゆる部分の運動や感覚機能に刺激が伝わるように、全体は構成されている」とし、体の働きを相互に関連する統一体として考えた。また、生命が維持されているのは感覚への絶

えざる刺激によるものと考え、彼はそれを光、音、空気、熱などの「外的刺激」と飲食物、血液、内臓器官、精神などの「内的刺激」に分けた。ここから彼は、あらゆる病気は生命体への通常の刺激に過不足が生ずると体内システムの健全な働きが失われるため誘発されると推論し、健康の維持は内外の環境を適切に保つことが不可欠であるとする結論を導いている。⁴²

精緻な顕微鏡も得られず、後年近代医学を飛躍的に進展させる細菌学の発達にも程遠かったラッシュの時代には、湿潤な沼地や腐った廃棄物から発生するミアズマと呼ばれる悪性のガスが人体になんらかの悪影響を及ぼし、病気を引き起こすのだという従来の仮説が医師の間には根強く残っていた。93年に突如として黄熱病がフィラデルフィアを襲った時、ラッシュの黄熱病の診断も、汚染された空気の「外的刺激」がそれを吸い込んだ人体の血管収縮運動を過度に刺激したために、感染者に突然の下痢と高熱を引き起こしたと診断してミアズマ説に賛同するものだった。スコットランド啓蒙の強い影響を受けた彼の医学観からすれば、ラッシュが先ず都市の恶劣な環境を疑い、いち早く熱病の原因を「夏の暑さと腐敗物の所産」と見なしたのは必然的なことだった。かくして彼は「劇的療法」を用いて、できるだけ早期に瀉血を繰り返しつつ、水銀を投与して人体と神経システムを弛緩させて体内の過剰な刺激を抑えることに全力を注ぎ、その強力な治療法こそ最も医学理論にかなうものであると終生信じて疑わなかった。このような観点から見れば、ラッシュの「劇的療法」は、黄熱病の危機的状況の中で偶然生まれた治療法というよりも、むしろ18世紀啓蒙の時代の環境を重視するスコットランドの医学理論と倫理哲学の融合の所産であったと言える。

V 終りに—ラッシュの劇的療法の功罪と 近代共和主義文化の限界

アメリカ独立戦争と共和政体の樹立に人類史上の特別な意味を重ね合わせたラッシュやジェファソンなどの知識人の多くは、新大陸の自然の豊富

な恵みと商業的繁栄を賛美し、ビュフォンやレイナルの偏見的な衰退説に激しく反発した。他方で、建国期の知識人は、自然や社会環境が今後の新共和国の文明や習慣の発達に与える影響に強い関心を持ち続けた。1787年にラッシュは、「連合規約の欠陥」と題するエッセイを刊行し、「革命戦争は終ったが、これが決してアメリカ革命の終結を意味するものではない」と民衆に警告し、「市民の原理、道徳、習慣を共和政体に適応させるためには、合衆国に至るところであらゆる種類の知識の普及がなされなければならない」として、共和主義にふさわしい教育の重要性を説いた。⁴³ 共和国の「健康」はその環境に大きく依存しており、医師として環境の改善こそがラッシュには急務であるように思われた。ラッシュが後半生をかけてディキンソン大学の創設やペンシルヴェニアにおける公立学校や連邦大学の設立構想など市民の道徳観の育成と知識の普及に尽力を注ぎ、さらに旺盛な文筆活動を通じて、女子教育、奴隸解放、刑務所改革、市街の清掃や禁酒・禁煙運動など様々な社会改革の推進を提唱した思想的な背景には、上述したようなスコットランド道徳哲学の大きな影響を看過することはできないのである。⁴⁴

しかし皮肉にも、同様の環境重視の啓蒙思想から引き出されたラッシュの「劇的な治療法」は、より稳健で伝統的な治療法を擁護する多くの医師達やフェデラリスト派の毒舌な論客ウィリアム・コベット(William Cobbett)などの激しい批判にさらされることとなった。⁴⁵ だが、こうした批判を乗り越えて1800年までにラッシュの医師としての名声は、ペンシルヴェニア大学医学部における彼の揺るぎない地位に支えられた旺盛な執筆活動と精力的な医学教育によって確立された。また、各地から集まつた多くの医学生によって彼の独特的医学理論と治療法は全米に広められてゆく。ある統計によれば、1765年から1815年の間、808人の医者がペンシルヴェニア大学で養成されたが、この数は同時期の全米全ての医学校の卒業生の総計の半数以上を占めると推計される。⁴⁶ さらに南部では最もペンシルヴェニア大学の影響が強く、例えばチャールストンの医師会発足のメンバーの全員がラッシュの下で医学

を学んだ医師達で構成されていた。ラッシュの門下生の一人でサウス・カロライナのウィリアム・アルストン(William Alston)医師は、19世紀初頭には師匠の「新治療法」が地方医者達の間に定着しつつあることを伝えて、次のように書き送っている。「貴殿の医学理論は南部諸州では急速に広まりつつあります。かつて新治療法に異議を唱えていたこの地の医師達は我々と同様に今では大量の瀉血を繰り返しております。」⁴⁷ やがて19世紀の初頭にはラッシュの治療法はアメリカ医学を特徴づけ、近代医学史に大きな刻印を残すことになるのである。

アメリカ建国期の専門医学の発達の過程でラッシュの危険で過酷な「劇的治療」は、次第に正統性を獲得するようになるものの、19世紀の前半に近代生理学の基礎を築いたフランスの「パリ学派」が台頭すると彼の独善的な医学理論は急速に影響力を失ってゆき、それとともにアメリカ医学史上ラッシュの評価も著しく低下した。ところが皮肉にも、近年歴史家によって革命から建国期における共和主義思想の重要性が強調されるようになると、ラッシュは共和主義に根ざした慈悲深い人道主義的社会改革運動の先鞭をつけた代表的な建国期の知識人として再び研究者の関心を引いている。しかしさすでに見えてきたように、ラッシュのこのような二面性に共通する思想的基盤は、スコットランド啓蒙の洗礼を受けた彼の医学観や道徳観の中に等しく見ることができるのである。それゆえ、歴史的文脈を無視して現代医学の視点からのみ彼の医学理論や治療法の功罪を評価することは、ラッシュと彼の同時代の知識人を取り巻く特有な知的世界の存在を軽視することになり兼ねない。

知識と職業の専門化にともなって一世を風靡した博物学的世界が衰退し、宗教的コミュニティの世俗化と商業的近代共和政社会への移行が急速に進む18世紀末の大きな転換点に生きた知識人達は、安定した拠り所として普遍的な倫理観や「科学的」で包括的な理論を必死に模索したのである。現代的観点から見ればしばしば短絡的で独善的と思われるような彼らの思考様式は、ラッシュに限らず、近代の共和主義的精神世界の知識人に共通して見られた

特質であり、それはまた彼らの思考の硬直性と時代の限界を示すものであつたと言えよう。

注

- 1 19世紀初頭の「劇的療法」に対するラッシュの指導的役割を評価した議論としては次の論文が参考になる。Robert B. Sullivan, "Sanguine Practices: A Historical and Historiographic Reconsideration of Heroic Therapy in the Age of Rush," *Bulletin of the History of Medicine*, vol. 68, no. 2 (1994), pp. 211-234; Richard H. Shryock, "The Medical Reputation of Benjamin Rush: Contrasts over Two Centuries," *Bulletin of the History of Medicine*, vol. 45, no. 6 (1971), pp. 507-552; Alex Berman, "The Heroic Approach in 19th Century Therapeutics," *Bulletin of the American Society of Hospital Pharmacists* (September-October 1954), pp. 320-327; L. H. Butterfield, "The Reputation of Benjamin Rush," *Pennsylvania History*, vol. 17, no. 1 (1950), pp. 3-22.
- 2 Nathan G. Goodman, *Benjamin Rush: Physician and Citizen 1746-1813* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1934); Carl Binger, *Revolutionary Doctor: Benjamin Rush, 1746-1813* (New York: W. W. Norton, 1966); David Freeman Hawke, *Benjamin Rush: Revolutionary Gadfly* (Indianapolis and New York: The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1971). その他、必ずしも伝記的研究ではないが、ラッシュの思想に光を当てたものとしては、次の研究が有用である。Donald J. D'Elia, "Benjamin Rush: An Intellectual Biography," (Ph.D. dissertation, Pennsylvania State University, 1965) and D'Elia, *Benjamin Rush: Philosopher of the American Revolution* (Philadelphia, 1974).
- 3 Hawke, *Benjamin Rush: Revolutionary Gadfly*, p. 83.
- 4 Hawke, *Benjamin Rush: Revolutionary Gadfly*, pp. 115-120.
- 5 Rush to Horatio Gates, September 5, 1781 in *Letters of Benjamin Rush*, I, p. 265.
- 6 Rush, "Of the Mode of Education Proper in a Republic" (1798), in Dagobert D. Runes, ed., *The Selected Writings of Benjamin Rush* (New York: Philosophical Library, 1947), p. 92; Rush, *Essays on Education in the Early Republic* (Cambridge: Harvard University Press, 1965). ラッシュの教育観は、早くから歴史家の関心を引いてきた。古典的な研究としては、先ずグッドのものが挙げられるが、建国期共和主義思想との関連の中ではラッシュの教育観を分析したものとして、メルヴィン・ヤザワの研究が優れている。Harry G. Good, *Benjamin Rush and His Services to American Education* (Berne, Indiana: Witness Press, 1918); Melvin Yazawa, *From Colonies to Commonwealth: Familial Ideology and the Beginnings of the American Republic* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1985), especially chap. 7.

- 7 Francis Hopkinson, "Account of the Grand Federal Procession," in Hopkinson, *Miscellaneous Essay* (Philadelphia, 1792), II, pp. 349-401.
- 8 Benjamin Rush to Elias Boudinot? "Observations on the Federal Procession in Philadelphia," July 9, 1788, in L. H. Butterfield, ed., *Letters of Benjamin Rush* (Princeton: Princeton University Press, 1951), I, pp. 470-477.
- 9 Rush to John Adams, July 2, 1788, Butterfield, ed., *Letters of Benjamin Rush*, I, pp. 468-469.
- 10 Joseph J. Ellis, *After the Revolution: Profiles of Early American Culture* (New York and London: W. W. Norton, 1979), pp. 3-21.
- 11 Eve Kornfeld, "Crisis in the Capital: The Cultural Significance of Philadelphia's Great Yellow Fever Epidemic," *Pennsylvania History*, vol. 51, no. 3 (1984), pp. 190-191.
- 12 フィラデルフィアの黄熱病蔓延の社会的背景を考察した古典的な研究として次のものを参照されたい。J. H. Powell, *Bring Out Your Dead: The Great Plague of Yellow Fever in Philadelphia in 1793* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1949)。また日本における研究として、山田史郎が黄熱病によって崩壊したコミュニティを再構築する手段として活字メディアの役割を考察した論文を著して建国期フィラデルフィアの社会状況を詳しく紹介している。山田, 「黄熱病の首都フィラデルフィア, 1793年」金井他『常識のアメリカ・歴史のアメリカー歴史の新たな胎動』(木鐸社, 1993年) 所収, 75 – 112頁。
- 13 Powell, *Bring Out Your Dead*, p. 219.
- 14 Rush to John R. B. Rodgers, "An Account of the Prevailing Epidemic," October 3, 1793, in *Letters of Benjamin Rush*, II, p. 694; Martin S. Pernick, "Politics, Parties, and Pestilence: Epidemic Yellow Fever in Philadelphia and the Rise of the First Party System," *William and Mary Quarterly*, vol. 29 (October 1972), pp. 559-586. フランス革命の勃発が当時のより広い政治文化の変容を促進したことを強調する論文として, 描稿「フランス革命とアメリカ建国初期におけるフェデラリスト」「アメリカ研究』27 (1993), 73 – 93頁を参照されたい。
- 15 Rush to John Cookley Lettsom, November 15, 1783, in *Letters of Benjamin Rush*, I, pp. 312-313.
- 16 Rush to John R. B. Rodgers, "An Account of the Prevailing Epidemic," October 3, 1793, in *Letters of Benjamin Rush*, II, p. 695.
- 17 Rush to John Redman Cox, September 19, 1794, in *Letters of Benjamin Rush*, II, pp. 750-751; Goodman, *Benjamin Rush: Physician and Citizen 1746-1813*, pp. 199-203.
- 18 Whitfield J. Bell, Jr., "The Scientific Environment of Philadelphia, 1775-1790," *Proceedings of the American Philosophical Society*, vol. 192 (1948), p. 13.

- 19 Lester S. King, *The Medical World of the Eighteenth Century* (Chicago: The University of Chicago Press, 1958); Edwin H. Ackerknecht, *Medicine at the Paris Hospital 1794-1848* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1967); George Rosen, "The Philosophy of Ideology and the Emergence of Medicine in France," *Bulletin of the History of Medicine*, vol. 20, no. 2 (1946), pp. 328-339.
- 20 William R. Brock and C. Helen Brock, *Scotus Americanus: A Survey of the Sources for links between Scotland and America in the Eighteenth Century* (Edinburgh: The Edinburgh University Press, 1982), p. 13.
- 21 Joseph F. Kett, "Provincial Medical Practice in England, 1730-1815," *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences*, vol. 19 (1964), p. 25.
- 22 Francis R. Packard, "How London and Edinburgh Influenced Medicine in Philadelphia in the Eighteenth Century," *Annals of Medical History*, new series vol. 6, no. 3 (1932), p. 224.
- 23 Deborah C. Brunton, "The Transfer of Medical Education: Teaching at the Edinburgh and Philadelphia Medical Schools," Richard B. Sher and Jeffrey R. Smitten, eds., *Scotland and America in the Age of the Enlightenment* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1990), p. 247.
- 24 William Birken, "The Dissenting Tradition in English Medicine of the Seventeenth and Eighteenth Centuries," *Medical History*, vol. 37, no. 2 (1995), pp. 197-218.
- 25 留学中のラッシュがジョン・モルガン医師に宛てた書簡は、カレンの寛大な人柄や学者としての偉大さを感動的に伝えている。Rush to John Morgan, November 16, 1766, in *Letters of Benjamin Rush*, I, pp. 28-29; Rush to John Morgan, January 20, 1768, in *Letters of Benjamin Rush*, I, p. 49.
- 26 King, *The Medical World of the Eighteenth Century*, pp. 140-141.
- 27 Rush to John Morgan, July 27, 1768, in *Letters of Benjamin Rush*, I, p. 61.
- 28 医学史及び医学理論上のカレン、ブラウン、ラッシュの評価は、キングの研究書で詳しく論じられており参考になる。Lester S. King, *Transformations in American Medicine: From Benjamin Rush to William Osler* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1991), especially chap. 3.
- 29 Rush, *Medical Inquiries and Observations* (Philadelphia, 1796), IV, pp. 139-140.
- 30 Rush to John Redman Coxe, September 19, 1794, in *Letters of Benjamin Rush*, II, p. 750.
- 31 W. P. Jones, "The Vogue of Natural History in England, 1750-1770," *Annals of Science*, vol. 2, no. 3 (1937), pp. 346-347.
- 32 18世紀を風靡した博物学流行の背景を知る邦語文献として、植物学者による次の著書が優れている。西村三郎『リンネとその使徒たち—探検博物学の夜明け』(朝日選書, 1997年)。

- 33 モンテスキュー(野田良之他訳)『法の精神』全三巻 岩波文庫 1989年,特に中巻を参照のこと。
- 34 Antonello Gerbi, *The Dispute of the New World: The History of a Polemic, 1750-1900*, trans. Jeremy Moyle (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1973), p. 5; 邦語文献として, 明石紀雄, 『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念—アメリカ合衆国建国史序説—』(ミネルヴァ書房, 1993年), 111—115頁においてビュフォンの仮説を中心とした博物学的論争が紹介されている。また, ヴォルフ・レベニース(小川きくえ訳)『十八世紀の文人科学者たち』(叢書・ウニベルシタス, 法政大学出版, 1992年), 52—77頁も有用である。
- 35 Durand Echeverria, *Mirage in the West: A History of the French Image of American Society to 1815* (Princeton: Princeton University Press, 1957), pp. 3-14.
- 36 George W. Corner, ed., *The Autobiography of Benjamin Rush: His "Travels Through Life" together with his Commonplace Book for 1789-1813* (Princeton: Princeton University Press, 1948), pp. 43-46; Douglas Sloan, *The Scottish Enlightenment and the American College Ideal* (New York: Teachers College Press, Columbia University, 1971), pp. 190-194. 後年ラッシュ自身, エдинバラでの留学期間を次のように回想している。“The two years I spent in Edinburgh I consider as the most important in their influence upon my character and conduct of any period of my life.”(quoted in Corner, ed., *The Autobiography of Benjamin Rush*, p. 43). とりわけ, 彼はジェイムズ・ビーティによるディヴィド・ヒュームの懷疑主義的教義への反駁に感銘し, ビーティの著作, *An Essay on the Nature and Immutability of Truth* (1776) を高く評価している。革命後ラッシュは, アメリカ哲学協会のフェローとしてビーティを推薦した。Rush to James Beattie, August 1, 1786, in *Letters of Benjamin Rush*, I, p. 394.
- 37 18世紀イギリスにおける「消費革命」は近年英米の社会史家の注目を集めている。さしあたって, 次の著作と論文が有用である。Neil McKendrick, John Brewer, and J. H. Plumb, *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth-Century England* (Bloomington, Indiana, 1982); T. H. Breen, “‘Baubles of Britain’: The American and Consumer Revolution of the Eighteenth Century,” *Past and Present: A Journal of Historical Studies*, no. 119 (1988), pp. 73-104. 日本における文明論的視点からスコットランド学派の思想を考察した研究としては, 次の一連の論文が参考になる。佐々木武「<スコットランド学派>における<文明社会論>の構成」『国家学会雑誌』85巻, 7・8・9・10, 11・12号(1972年), 86巻, 1・2号(1973年)。最近の研究では, 田中秀夫『スコットランド啓蒙思想史研究—文明社会と国制』(名古屋大学出版会, 1991年)と『文明社会と公共精神—スコットランド啓蒙の地層』(昭和堂, 1996年)が優れている。

- 38 David Fate Norton, "Francis Hutcheson in America," *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, vol. 154 (1976), pp. 1547-1568.
- 39 Peter J. Diamond, "Witherspoon, William Smith and the Scottish Philosophy in Revolutionary America," in Richard B. Sher and Jeffrey R. Smitten, eds., *Scotland and America in the Age of the Enlightenment* (Edinburgh University Press, 1990), pp. 115-132; Shannon C. Stimson, "'A Jaly of the Country': Common Sense Philosophy and the Jurisprudence of James Wilson," *ibid.*, pp. 194-198.
- 40 Richard B. Sher, "From Troglodytes to Americans: Montesquieu and the Scottish Enlightenment on Liberty, Virtue, and Commerce," in David Wootton, ed., *Republicanism, Liberty, and Commercial Society 1649-1776* (Stanford: Stanford University Press, 1994), pp. 368-402; Richard B. Sher and Jeffrey R. Smitten, eds., *Scotland and America in the Age of Enlightenment* (Edinburgh University Press, 1990); R. H. Campbell and Andrew S. Skinner, *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment* (Edinburgh, 1982); Owen D. Edwards and George Shepperson, eds., *Scotland, Europe and the American Revolution* (New York: St. Martin's Press, 1977, c 1976); Gerry Wills, *Inventing America: Jefferson's Declaration of Independence* (New York: Vintage Books, 1978), especially chaps. 3 and 4; Caroline Robbins, *The Eighteenth-Century Commonwealthman: Studies in the Transmission, Development and Circumstance of English Liberal Thought from the Restoration of Charles II until the War with the Thirteenth Colonies* (Cambridge: Harvard University Press, 1961), chapter 6. 邦語文献としては、篠原久『アダム・スミスと常識哲学』(有斐閣, 1986年), 田中正司編, 『スコットランド啓蒙思想研究—スミス経済学の視界—』(北樹出版, 1988年), ホント・イグナイエフ編著(水田, 杉山監訳)『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』(未来社, 1990年)が示唆に富む。
- 41 このエッセイは、恐らくラッシュの思考様式がロックの経験論とスコットランド倫理哲学によって大きな影響を受けていたことを最も雄弁に示している。Rush, "The Influence of Physical Causes upon the Moral Faculty" (1786), in Eagobert D. Runes, ed., *The Selected Writings of Benjamin Rush* (New York: Philosophical Library, 1947), pp. 181-211. また、建国期の知識人の共有する知的世界観を論じたものとして、次の論文は注目に値する。George Rosen, "Political Order and Human Health in Jeffersonian Thought," *Bulletin of the History of Medicine*, vol. 26, no. 1 (1952), pp. 32-44.
- 42 Rush, *Lectures on Animal Life* (1799), in Runes, ed., *The Selected Writings of Benjamin Rush*, pp. 133-146.
- 43 Rush, "On the Defects of the Confederation," in Runes, ed., *The Selected Writings of Benjamin Rush*, p. 26.
- 44 建国期の改革運動とラッシュの役割を論じた最近の研究としては次のものを参照

- されたい。Robert H. Abzug, *Cosmos Crumbling: American Reform and the Religious Imagination* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1994), chapter 1; Margaret A. Nash, "Rethinking Republican Motherhood: Benjamin Rush and the Young Ladies' Academy of Philadelphia," *Journal of the Early Republic*, vol. 17, no. 2 (1997), pp. 171-191; Linda K. Kerber, *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America* (New York, 1985); Jacqueline S. Reinier, "Rearing the Republican Child: Attitudes and Practices in Post-Revolutionary Philadelphia," *William and Mary Quarterly*, vol. 39 (1982), pp. 150-163.
- 45 Winthrop and Frances Nelson, *Verdict for the Doctor: The Case of Benjamin Rush* (New York: Hasting House, 1958); William Reitzel, "William Cobbett and Philadelphia Journalism: 1794-1800," *Pennsylvania Magazine of History and Biography*, vol. 59, no. 3 (1935), pp. 223-244; L. H. Butterfield, "Appendix III: The Cobbett-Rush Feud," in *Letters of Benjamin Rush*, II, pp. 1213-1218.
- 46 Whitfield J. Bell, Jr., "Medicine in Boston and Philadelphia: Comparisons and Contrasts, 1750-1820," in P. Cash, E. H. Christianson, and J. W. Estes, eds., *Medicine in Colonial Massachusetts, 1620-1820* (Boston: The Colonial Society of Massachusetts, 1980), p. 176; William G. Rothstein, *American Physicians in the Nineteenth Century*, p. 98; Leonard K. Eaton, "Medicine in Philadelphia and Boston, 1805-1830," *Pennsylvania Magazine of History and Biography*, vol. 75 (1951), p. 70.
- 47 Quoted in Joseph I. Waring, "The Influence of Benjamin Rush of the Practice of Bleeding in South Carolina," *Bulletin of the History of Medicine*, vol. 35, no. 1 (1961), p. 236.

Synopsis

Benjamin Rush's Heroic Therapy and the Scottish Enlightenment

Yoshio Higomoto

Historians have characterized the medical situation between the American Revolution and the Jacksonian era as “the age of heroic therapy.” The heroic therapy, which consisted of copious bleeding and the repeated use of calomel, a chalky mercury compound, and other strong emetics, terrified many patients and their families. Medical historians have often associated such treatment with Benjamin Rush, a prominent physician in Revolutionary America, and criticized him for his cruel, dogmatic therapeutics. With the rekindled interest in the new intellectual and social history, however, scholars have begun to pay particular attention to the other side of Rush, an avid supporter of humanitarian social reforms. How can we reconcile these seemingly different interpretations of the controversial Philadelphian doctor? In order to answer this question, this paper attempts to discuss the relationship between Rush's medical thought and his enthusiasm for social reforms in the intellectual milieu of the late eighteenth century.

Along with Rush's Revolutionary millennialism, the Scottish Enlightenment and medical theory lay deep at the core of his medical system and reform spirits. The Edinburgh medical school in the mid-eighteenth century boasted several distinguished teachers and attracted a number of young talented men from every part of the Anglo-American world. William Cullen, one of the most renowned medical professors in Edinburgh, was particularly popular

among students. Influenced by the vogue of the natural history, he tried to classify various diseases with the hope of creating a comprehensive medical system. He consequently rejected the age-old humor theory, and instead emphasized the excessive movement of blood vessels as the primary cause of all fevers. It was Cullen who impressed young Rush and left a lasting intellectual mark on his medical thought. Rush brought Cullen's new medical system back to Philadelphia and, after his election to the professorship of the Philadelphia Medical School, he introduced his mentor's medical theory to his students.

The creation of the large republican nation under the Federal Constitution in 1787 brought about an exuberant forecast of American leadership in the arts and sciences. Rush and many other intellectuals expected the arts and sciences would flourish in the newly established Republic. The yellow fever epidemic of 1793 in Philadelphia, however, shattered this optimistic vision of progress. It paralyzed the nation's capital, killing more than one fifth of the population in just a few months. Patriotic Rush stayed in the city and devoted himself to the treatment of the sick. In this dreadful ordeal Rush tried out his dangerously drastic therapy that, he believed, would be most suitable to Americans in the "strong, new, and fresh Republic."

A close look at Rush's unique medical theory reveals that the drastic treatment is not a coincidental product of his trial and error experiments, but rather a logical combination of recent medical theories and the Scottish moral philosophy in which Rush had immersed himself in Edinburgh. This philosophy, which emphasized an innate "moral sense" and the environmental origins of virtue and vice, had a great influence on Rush's medical thought. It seemed to him that education was the most important means of instilling virtue and useful knowledge into the republican citizens. Rush's environmental

approach to social and medical reforms likewise made him explore the correlation between the environment and health in the nation. Based on his nationalistic assumption that diseases in republican America are of a higher order than in worn-out monarchical Europe, Rush came to believe that Americans should develop a distinct system of medicine to cope with such stronger variations of disease. It was a historical irony that Rush's search for an "American system of medicine" ended in his controversial "heroic" therapy. Perhaps we cannot fully understand Rush's seemingly contradictory behaviors until they are properly interpreted in a historical context.